話 題

平成 22 年度日本水産学会春季大会を終えて

総務幹事 杉田治男
日本大学生物資源科学部

HARUO SUGITA

College of Bioresource Sciences, Nihon University

平成 22 年度日本水産学会春季大会は、神奈川県藤沢市にある日本大学生物資源科学部で 3 月 26 日～30 日に開催された。春季大会を担当する関東支部内のローテーションでは東京大学海洋研究所が当番校であったが、生憎と同所の柏キャンパスへの移転時期と重なったため、舩水産総合研究センター中央水産研究所との共催で日本大学がお引き受けすることとなった。この案が出てきたのは第 5 回世界水産学会議（WFC2008）の会期中であり、まさに寝耳に水の諺通りである。今大会の開催を受諾するにあたり、海洋生物資源科学科内では賛否両論があった。というのは、大会会期時の学科教員は僅か 16 名であり（現在は 19 名）、内 3 名が今秋継続審査を受ける JABEE 対策要員として実行委員から除外せねばならず、実質 13 名で大会の準備を進めなければならない内部事情があったからである（なお会期中は学科教員全員に加え、本学部獣医学科中西照幸教授、森友忠昭准教授の計 18 名が運営委員として業務に当たった）。結局、大会開催を受諾することとなり、大会委員長には吉原喜好教授が選出された。副委員長は当初、中央水産研究所の井上潔所長に決定していたが、その後センター内での移動により、後任の内田卓志所長が任に当たられた。中央水産研究所からの 16 名の運営委員には、会期中の会場運営（責任者）やプログラムの編集などに快く対応していただいたため、支障なく大会を運営することができた。準備の段階からご参画いただいた同所の森田貴己研究員をはじめ、関係各位にこの場を借りて感謝申し上げます。また少人数でなんとか実施することができたのは学会運営会社（トーヨー企画㈱）のお陰であり、担当の江守麗子女史をはじめ、同社の関係者に深謝する次第である。

今回は、日本大学としては運営会社に業務の一部を委託する初めての大会であり、どの程度の予算規模で運営すればよいのか、皆目見当がつかなかった。そのため、交歓会などを含め身の丈にあった運営を心がけざるを得なかった。参加者は 1,350 名、研究発表は 878 題（内、口頭発表 663 題、ポスター発表 215 題）であり、昨年度の春季大会（東京海洋大学）と比べれば若干少なかった。しかし、全体として大きな混乱もなく、また会計的

にも僅かではあるが黒字になったのであれば、これは成功と呼ぶべきことであろう。総務幹事としては、全体の作業工程表を作成し、あとはただ各パートが働きやすい環境作りに務めたにすぎない。しかし WFC2008 のときにも感じたことであるが、学会の運営での苦労体験は大会終了後に急速に忘れ去られるものであり（「脳は自己防衛的につらい体験を忘れる傾向にある」とか!?!）、総務幹事として何を行ったか、約 1 ヶ月半を経た現時点では多くを憶えていないのが実感である。そこで、今回の大会顛末記では、準備段階から携わった各パート担当者の体験や意見を紹介することとした。なお、大会運営の資料などは現在、編集中であり、いずれまとめて CD-R に収める予定である。今後、大会を担当される機関には是非ご利用いただきたい。

庶務担当

小島隆人, 間野伸宏, 宮内浩二, 榎本亜矢, 高野美穂
TAKAHITO KOJIMA, NOBUHIRO MANO, KOJI MIYAUCHI, AYA ENOMOTO AND MIHO TAKANO

平成 22 年度春季水産学会における庶務幹事は上記の 5 名であり、主に、アルバイト関係、昼食・弁当の手配、会員交歓会、緊急時マニュアルの作成、大会運営マニュアルの作成、会場使用料の折衝、必要物（消耗品）リストの作成、備品の管理・貸し出し等について担当した。また、総務や会場担当者と協力する形で、託児所の手配・設営、案内板・掲示物の準備作成、総会・理事会・評議員会・各種委員会の準備も行った。託児所については、結果として 1 名の方のご利用に留まったが、今後も女性研究者の増加が見込まれるなか、水産学会としてもより積極的に PR・運営を図っていくべきであると感じた次第である。

本大会では、本学学部生および大学院生をアルバイトとして会期中の 5 日間のほか、準備日の 1 日を加えて延べ約 220 名雇用し、大会初日（3 月 26 日）の前日 25 日より、設営・受付・運営補助・および会場係としての業務に当たらせた。庶務では、このアルバイトの必要人数を会場や担当別に算出し、全体会議で承認を得た後、各担当（会場）の責任者に人選をお願いした。そして、学会直前にアルバイト学生を集めて説明会を実施した。特に、各発表会場における進行が円滑に進められるよう、詳細な運営・進行手順の説明を実施した。アルバイトとして参加してくれた本学学生の多くは、熱意をもって学会の運営・進行にあたってくれたようであり、複数の参加者の方からお褒めの言葉を頂いたのは嬉しい限りであった。

庶務幹事の重要な任務の一つであった会員交歓会については、本大会では学内の学生食堂が利用できたため、比較的経費を安価に抑えることができた。しかし、無駄な経費は極力排し、演台上方の横断幕も大型プリンタを使用しての手作りとした他、結果的には業者の好意でテーブル上には立派な花が飾られることとなったが、テーブルの装飾など飲食物以外の予算は一切含めなかった。食堂業者の御配慮にはこの場を借りて厚く御礼申し上げたい。当日も数十名の申し込みがあり、最終的に400名を超える方が参加して頂けたようである。

なお本学会は、3月26日から実施されたが、25日に本学の卒業式があったため、前日の19時近くまで会場準備が出来ず、準備が終了したのは大会前日の23時近くであった。最近の春季大会の開催は3月中に実施されるようになってきているが、多くの大学では、卒業式に加え、新入生を中心に様々な催し物が3月中に開催されるようになってきていると聞いており、大学で行われる大会の場合、開催期間についてはさらなる検討が必要になってくるかもしれない。

大会受付・会計担当

高井則之

NORIYUKI TAKAI

大会受付係と会計業務の責任者は筆者が兼務した。大会受付には、本学実習助手の榎本亜矢氏とトーヨー企画の江守麗子氏が担当者として常在し、業務を取り仕切ってくださった。また、合計22名のアルバイト学生が交代で勤務し、窓口業務を担ってくれた。お陰様で受付の運営は円滑に進行し、大きな混乱が生じることはなかった。

会計業務は大会が終わった後も続いており、未だ残務処理に苛まれている。収支報告書は、全ての書類が出そろって6月以降に作成する予定である。

大会期間中は大会受付に簡易金庫を置き、受付業務と会計業務を並行して進めた。大会会場には外来者が自由に出入りできるので、受付の簡易金庫は常に盗難の危険にさらされている。現金を安全に管理するためには、大会受付係と会計係の責任者を分離し、会計の責任者が現金管理に専心できるような体制を組むべきかと思われる。

プログラム編集担当

朝比奈 潔

KIYOSHI ASAHINA

大会の運営については過去何回か経験があるが、間に企画会社がある運営は今回が初めてで、その点、不安と期待があった。うまくいくのだろうかという不安と、多少とも業務が楽になるだろうという期待である。結論から言うと、楽になった部分も確かにあったが、思うよ

うにいかない部分もけっこうあった、というところであろうか。

1月中旬に発表申し込みの締め切りがあり、まもなく企画会社からデータが送られてきた。従来は、受け付けたデータをすべて自分たちで処理していたから、受付データの一次処理に関しては大幅に負担が軽減された。しかし、送られてくるデータは、いわばエクセルの巨大な表であり、並べ替えは容易でも、出力形式を変えたり検索したりするには非常に不便である。そこで、必要なデータだけエクセルファイルからデータベースソフトに読み込んだ。データは問題なくデータベースソフトに移り、これで検索や出力形式の変更が自由にできるようになった。データ変換はこれで楽勝かと思われたが、何かのけげんでデータ間のずれが生じ、途中でそれに気付いて1日がかりですべてのデータを照合しなければならないことになった。パソコンソフトの過信は禁物である。

あとは、データを口頭発表とポスター発表に分け、市販の名刺作成用紙に必要な事項を出力してカード化し、部門・細目ごとにカードの山を作ればよい。ポスター発表の分はポスター会場担当者に渡し、口頭発表のカードを当学科の教員の専門に合わせて分配し、1月25日から各会場のプログラム編成と、プログラムに沿った座長候補選びに着手した。ただし、当学科には社会科学の専門教員がいないので、この分野は中央水研にお願いした。

運営会社へ提出するファイルの締め切りは1月末だったので、これまでに各会場の講演番号と座長候補のリストを同時にまとめなければならなかったが、これにかなり無理があった。すなわち、演者の横並びをチェックする前に座長を決めなければならず（座長候補の1/3くらいは大会に参加するかどうかははっきりしなかった）、運営会社とのやり取りを通して、大会の前日まで座長選びに苦勞することになった。いっそのこと座長制度を廃して発表の終わった人が次の発表の司会役をやるようにして、何か問題が生じた場合のみ会場責任者がフォローするようなシステムにしないと、今後もこの問題は解決しないと思われる。

口頭発表の件数は海洋大で開催する際の8割程度だったので、何とか10会場に収めることができた。しかしその分、スケジュールが過密になり、特に1日目は午後1時から6時までぎっしり講演が詰まり、途中で休憩時間を入れればよかったと、今になって反省している。

さて、プログラム編成と並行して講演要旨集の編集もやらなければならなかった。今回は1冊ですべてすむように（その分、厚くなったが）、プログラム、簡易プログラムに加えて発表者インデックスも載せて、また従来あまり効果的に使われていなかった裏表紙に会場案内

図を配してみた。何かの折、使い勝手についてご意見を賜れば幸甚である。

会場担当

荒 功一、鈴木美和

KOICHI ARA AND MIWA SUZUKI

会場係は、口頭発表およびシンポジウム、委員会の各会場の配置および設営、当日の会場運営等を担当した。会場係はいずれも初めて会場設営を任された身であったが、東京海洋大学の大島敏明教授より昨春の大会時に会場の設営や運営について丁寧に説明して頂いたおかげで、大きな混乱もなく運営に当たることができた。大島先生にはこの場を借りて改めて感謝申し上げたい。

実際の会場の配置および設営にあたっては、できる限りコンパクトに発表会場をまとめること、人の導線をスムーズにすること、およびスクリーンを見やすくすることに特に腐心した。会場のコンパクトさについては会期中にも幾人かの方々に好評価を頂き安堵したものの、口頭発表が行なわれた本館の4階以上の各階は互いにとっても似た構造をしており、設営している我々も何階にどの会場があるのかを覚えるのに苦労したほどであった。それゆえ案内表示を工夫して分かりやすく掲示したつもりであったが、階段に案内を掲示するのを忘れる等の不備もあり、参加者の皆様には会場配置に慣れるまでにご不便をおかけしたこともあったかと反省している。また、委員会やシンポジウムが行われた10号館へ誘導するための案内板も、ただ広いキャンパスの面積に対して不足しており、構内で迷われた方も多かったのではないと思う。今後の反省材料としたい。

会場係にとって本大会の準備での最難関だった点は、会場設営日(大会前日)が卒業式と重なったことである。また本館の南側と10号館の一部の講義室には陽が燦々とあたるため、スクリーンが白く見えてしまうという難点があった。そのため、いくつかの部屋の前方の窓ガラス数面に黒い遮光フィルムを貼り付けて回らなければならなかったが、結果としてスクリーンに映された画像はどの口頭発表の会場も見やすいものとなった。口頭発表の各会場の設営は、卒業式を終えた夜に取りかかり、日付けが変わる頃によりやく整った。何より、会場設営のため卒業式の日在大学を晴れて巣立つ教え子達と最後の語らいや写真撮影を満足にできなかったのが悔やまれてならない。口頭発表の会場のAV器機システム・画像・マイク等の設定・準備の一切は、本学が委託している東通産業㈱のエキスパート(新井氏)にお願いしたのだが、新井氏に細部に至るまで様々なサポートをしていただいたお陰で本大会が円滑に準備・運営できた部分が大い。この場を借りて御礼申し上げる。

渉外担当

森 司、糸井史朗

TSUKASA MORI AND SHIRO ITOI

渉外は、森司准教授、糸井史朗専任講師の2名で担当した。担当業務としては、展示広告協賛の依頼から対応まで、ポスター会場の設定、中高生の研究発表会の企画から実施までと非常に幅広いものであった。

展示広告協賛については、昨今の経済情勢もありご協力いただけるのか不安を抱いていた。2009年の11月下旬に依頼先リストの作成、依頼の送付を行ったが、ご協力いただいた企業の担当者の話を聞くと、予算措置などの手続きが必要とのことで、もう少し早く連絡してもらえればよりスムーズに対応できた、という反応であった。今後、大会を開催する担当機関は、できるだけ早く依頼を出しておく必要があるのかもしれない。会場準備の都合上、各出展企業の担当者の方には事前にマニュアルを配布し、事前準備の予定や宅配便での搬入の予定を伺った。各出展企業の担当者の方々からのレスポンスが非常に迅速であったため、スムーズに準備・運営を行うことができた。感謝の念に堪えない。今大会の企業展示で特に配慮したのは、宣伝効果である。せっかく出展していただくからには、高い宣伝効果が必要と考え、ポスター発表会場で展示を行っていただこうと考えた(図1)。幸い、本学ではポスター会場と企業展示を同時に行うことのできる会場を確保できたため、ポスター発表の会場の周囲を取り囲む形で企業展示のブースを配置した。また、ポスター発表も3日間、毎日研究発表を入れ替えることで、多くの学会員の方々の目に触れることを意識した。最後に、今大会でご協力いただいた企業・団体には、心から感謝申し上げる。

ポスターによる研究発表の会場は先述の企業展示とセットで準備・運営を行った。例年、ポスター発表会場は

図1 ポスター発表と企業展示ブースがセットになった会場

図2 高校生・中学生による研究発表会会場

窮屈で発表を聞きにくい思いをしていたので、できるだけゆったりとしたスペースを確保するとともに、企業展示の配置との兼ね合いから、動線にも配慮した。その結果、ポスターの掲示期間を1日とし、3日間で215件の発表を行うこととした。そのため、1日の掲示時間を例年の大会よりも長めに設定したため、発表者の方々は違和感を覚えたかもしれない。企業展示の配置およびスペース確保のための苦肉の策であったことをお察しいただけると幸いである。

中高生の研究発表会は、最も長い時間をかけて準備・周知を行った。2009年5月頃から始動し、6月には水産系および関東地方の高校を中心に約1200校に案内状・ポスターを送付するとともに、大会ホームページにも案内・ポスターを掲載した。しかしながら、応募があったのは30校に満たない数で、学問としての水産系への関心の低さが窺えた。少子化問題や食糧自給率の低下など、わが国のおかれている現状を考えると、底辺からの掘り起こしが重要であることを認識すべき時に来ていると思われる。この中高生の研究発表会は、学会期間中の3月28日(日)の10時から13時までの間、本館3階

にて全国から応募してきた21校、26件の中高生と1件の市民団体のポスター発表がなされた(図2)。どの研究発表も素晴らしく、とても中高生の発表とは思えない出来具合であった。審査員は本大会に参加した多くの研究者(一般会員)による投票で決定され、以下の通り3賞が決定した(敬称略)。

金賞:「深海性甲殻類ナミクダヒゲエビの個体群生態Ⅱ」

鹿児島県立錦江湾高等学校 谷畑 遼・西元龍馬・古川智大・本村祐樹・山田みなみ・新納潤平

銀賞:「魚類耳石データベース作成と分類体系による耳石形態の類型化」

愛媛県立宇和島水産高等学校 山木 勝・椎名雅人

銅賞:「越後マコンブの洋菓子利用」

新潟県立海洋高等学校 山本陽葉・笠原 幸

同:「簡便な粒子画像流速測定法の開発」

群馬工業高等専門学校 榎本孝文・小澤沙紀・福島智美・星野由紀子・荻野和夫・木村清和・長阪玲子・潮 秀樹

同:「未利用水産資源の有効利用～廃棄物0の魚醤ペースト製造で水産加工場の環境改善を図る」

静岡県立焼津水産高等学校 湯口志栄・馬庭実咲・山脇夢生

この審査のための開票作業が行われている14~15時半までの間は中高生のためのエクスカージョンを行い、日本大学生物資源科学部のキャンパスの名所である博物館や本館13階にあるNUホールから江の島の海や美しい富士山を展望し、農場で飼育されているダチョウなど、計10箇所を見学した。

以上、この渉外担当として学会運営に携わり、展示広告協賛についてはできるだけ早くから動く必要があること、展示は出展企業の立場に立つ必要があること、そして、中高生の研究発表では普段からの情報発信の必要性を強く感じたことを最後に強調しておきたい。